研究ノート

まちの特徴を示す尺度の考察　尺度に心理学的尺度を加えた複数の視点からの評価

岩橋　俊哉（大東文化大学法学部）

On the Psychological scales of features of the town

Toshiya IWAHASHI

「こんなに素晴らしい御馳走を用意してもらってすまないんだけど、こんなに危険が多いのは御免だね。僕には土くれだった畑で食べている方が性に合ってる。あそこならば、安全で怖いこともなく暮らせるからね。」

イソップ寓話『田舎のねずみと都会のねずみ』より

要約　ひとの性格は五次元で評価されるようになってきた（村上 ,2011）が、まちの住みやすさや特性もひとつの尺度で比較すべきではなく、複数の次元で評価することが良いのではないだろうか。その理由のひとつは年齢や世代の違いによってまちの評価ポイントが異なると考えられるからである。若い世代はまちに活気や新奇性を求めがちであるが、子育て世代は教育の充実や、安全を求め、高齢者は特に医療や落ち着いた町を望むのではないだろうか。この違いに対応するには複数の尺度で対応するのが適切だと考えられる。さらにここに心理学的尺度を入れることにより、まちの個性をよりわかりやすい形で表現することができるのではないかと思う。このような手法により、より良いまちの住みやすさ尺度もできるのではないだろうか。

前回の紀要から続くが（岩橋 2018）、まちの特徴について、例えばさまざまな数的指標を組み合わせてレーダーチャートなどで表現する手法がよく見受けられる（米国でも同様。例えば、オルデンバーグ 2013）。その理由は、客観的であること、他のまちとの比較が容易なこと、行政で対応すべき施策の目標がわかりやすい（例えば保育園の数など）ことであろう。ただ、ここでの問題は 2 点ある。多くは指標の点数を加算している（もちろん標準化することによって重みを調整はしている）が、この際指標間の関連（= 相関関係）が加味されていないこと、もうひとつは質的評価がなされていないため、評価を直感的に捉えにくいという点である。

また、まちの数値指標の内容に関しては、例えば、ハーズバーグの「衛生理論」（2013）が参考になる。ハーズバーグは職場の満足度や従業員の動機づけについて研究を行った心理学者である。彼は職場の満足度要因を 2 種類に分けた。それが衛生要因と動機づけ要因であるが、衛生要因は例えば労働環境などの要因であり、この要因の改善は不満を解消するが、満足度をあげることにはな

らない。動機づけをあげるためには、仕事の達成感などの要因をあげることが必要であると主張した。これを街の要因にあてはめるならば、インフラの整備などがまさに衛生要因にあたるだろう。この要因は現在の日本では特に大きな問題にはならないだろうが、災害時などには、隠れていた脆弱性が露わになることもあるだろう。

以下で、都市の評価例を 2 つ挙げて、まちを評価する尺度について考えてみたい。

例 1.「住み良さランキング」（東洋経済新報社　2018）

尺度の算出に用いられているのが、官公庁が発表した公式の信頼できるデータであること、全ての尺度が数値であることから、数的処理ができるなど、非常に扱いやすい。また偏差値を利用しているため、数値のばらつきも適正な方法で補正されている。その一方で尺度間の相関関係を考慮していないことから、尺度がお互いに重なったものを評価している可能性を排除できないという問題がある。例えば、仮に病院の病床数と介護施設の定員で相関が高いとすると、合成尺度に歪みが生ずることが考えられる。

尺度のカテゴリーは［安心度］、［利便度］、［快適度］、［富裕度］、［住居水準充実度］の五つである。なお、満足度などのような主観的尺度は敢えて評価には入れていないように思われる。

5 つのカテゴリーと算出指標は以下のように記述されている。

［安心度］

（1）病院・一般診療所病床数（人口当たり）：2016 年 10 月 1 日現在　厚生労働省「医療施設調査」

（2）介護老人福祉施設・介護老人保健施設定員数（65 歳以上人口当たり）：2016 年 10 月 1 日現在　厚生労働省「介護サービス施設・事業所調査」

（3）出生数（15 ～ 49 歳女性人口当たり）：2016 年　総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態」

（4）年少人口（0 ～ 14 歳人口）増減率：2017 年 1 月 1 日 ÷2014 年 1 月 1 日　総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態」

［利便度］

（5）小売業年間商品販売額（人口当たり）：2016 年 6 月　総務省・経済産業省「経済センサス活動調査（商業統計）」

（6）大型小売店店舗面積（人口当たり）：2017 年 5 月　東洋経済「全国大型小売店総覧」

（7）飲食料品小売事業所数（可住地面積当たり）：2016 年 6 月 1 日　総務省・経済産業省「経済センサス活動調査（商業統計）」

［快適度］

（8）汚水処理人口普及率：2017 年 3 月末　国土交通省・農林水産省・環境省「汚水処理人口普及状況」、各都道府県資料

(9) 都市公園面積（人口当たり）：2016 年 3 月末　国土交通省調べ

(10) 転入・転出人口比率：2014 ～ 2016 年　総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態」

(11) 新設住宅着工戸数（世帯当たり）：2014 ～ 2016 年度　国土交通省「建築着工統計調査」

［富裕度］

(12) 財政力指数：2016 年度　総務省「市町村別決算状況調査」

(13) 地方税収入額（人口当たり）：2016 年度　総務省「市町村別決算状況調査」

(14) 課税対象所得額（納税義務者 1 人当たり）：2016 年　総務省「市町村税課税状況等の調査」

［住居水準充実度］

(15) 住宅延べ床面積（1 住宅当たり）：2013 年 10 月 1 日　総務省「住宅・土地統計調査」

(16) 持ち家世帯比率：2015 年 10 月 1 日　総務省「国勢調査」

評価方法について　原注

16 指標それぞれについて平均値を 50 とする偏差値を算出し、それらを平均して「安心度」「利便度」「快適度」「富裕度」「住居水準充実度」の部門ごとの評価、および総合評価を行っている。また、市町村合併のあった市については、転入・転出人口比率など整備不能なデータを除いて算出している。

上を要約すると、

・［安心度］は、医療と介護の指標として病院の病床数、介護施設の定員数、出生数、子供の数から算出している。前半は施設の充実度であるが、後半は安心であることの結果としての指標と考えられる。

・［利便性］は小売業の販売額、大型小売店の店舗面積、飲食料品小売事業所数から算出しているが、買い物のしやすさや繁盛している店が多ければ良い、という指標となるのではないか。

・［快適度］は、下水道の普及率、公園の面積、転入・転出人口、新設住宅着工戸数からの指標であるが、インフラの整備度合いというと点と、結果としての人口増減という尺度になっている。

・［富裕度］は、財政力指数、地方税収入額、課税対象所得額から算出しているが、税収から見た尺度である。住民の豊かさといった感じか。

・［住居水準充実度］は、住宅延べ床面積と持ち家世帯比率から算出。これも結果としての指標である。

この中で下水道の普及率などいくつかは、インフラストラクチャーの指標であり、ハーズバーグの述べる衛生要因項目であると考えられる。この要因は、住民の不満の解消には重要であるが、満足度をあげる要因にはならない。それでもこちらは行政に責任のある（コントロールできる）指標であるが、出生率のような政策（コントロール）の結果としての指標も、この中に含まれている。このように性質の異なる指標が混在しているところが特徴でもあるが、指標作成という面から見る

と、すっきりしないところがある。

例 2. 日本の都市特性評価（森記念財団　都市戦略研究所）

例 1 に比べると指標も多く、主観的評価尺度も入っているが、主な項目は、数値指標である。大都市を対象として絞っているため、人口規模の小さな町では「研究・開発」、「文化・交流」などでは該当するデータがない指標もある（表 1）。

表 1. 特性評価の指標

分野	指標グループ	指標	
経済・ビジネス	経済規模	1	付加価値額
		2	地域内総支出
		3	昼夜間人口比率
	雇用・人材	4	従業者数
		5	賃金水準
		6	高等教育修了者割合
		7	若手人材の転入出
	人材の多様性	8	女性就業者割合
		9	外国人就業者割合
		10	高齢者就業率
	ビジネスの活力	11	新設事業所割合
		12	労働生産性
		13	特区制度認定地域数
	ビジネス環境	14	対事業所サービス従業者割合
		15	新規オフィス供給面積
		16	フレキシブル・ワークプレイス密度
	財政	17	財政力指標
		18	経常収支比率の低さ
		19	実質公債費比率の低さ
		20	将来負担比率の低さ
研究・開発	研究集積	21	学術・開発研究機関従業者割合
		22	トップ大学数
	研究開発成果	23	論文投稿数
		24	グローバルニッチトップ企業
文化・交流	ハード資源	25	観光地の数・評価
		26	文化財指定件数
		27	景観まちづくりへの積極度
	ソフト資源	28	イベントの数・評価
		29	クリエィティブ産業従事者割合
		30	文化・歴史・伝統への接触機会
	受入環境	31	宿泊施設数
		32	高級宿泊施設客室数
		33	イベントホール数
		34	観光案内所・病院の多言語対応
	交流実績	35	休日の人の多さ
		36	行楽・観光目的の訪問の多さ

		37	国際会議・展示会開催件数
	発信実績	38	観光客誘致活動
		39	自治体SNSフォロワー数
		40	魅力度・認知度・観光意欲数
生活・居住	安全・安心	41	刑法犯認知件数の少なさ
		42	交通事故死亡者数の少なさ
		43	災害時の安全性
		44	空き家率の低さ
	健康・医療	45	医師の多さ
		46	病院・診療所の多さ
		47	平均寿命・健康寿命
	育児・教育	48	合計特殊出生率
		49	保育ニーズの充足度
		50	子供の医療費支援
		51	高偏差値高校数
	市民生活・福祉	52	外国人住民の受入体制
		53	要支援・要介護高齢者の少なさ
		54	地域包括支援センターの多さ
	居住環境	55	居住環境の満足度
		56	新規住宅供給の多さ
		57	住宅の広さ
		58	住宅のバリアフリー化率
	生活利便施設	59	小売事業所密度
		60	飲食店舗密度
		61	コンビニ密度
	生活の余裕度	62	可処分所得
		63	物価水準の低さ
		64	住宅コストの低さ
環　境	環境パフォーマンス	65	リサイクル率
		66	CO2排出の少なさ
		67	再生エネルギー自給率
		68	EV 充電スタンドの多さ
	自然環境	69	自然環境の満足度
		70	都市地域緑地率
		71	水辺の充実度
	快適性	72	年間日照時間
		73	気温・湿度が快適な日数
		74	空気のきれいさ
交通・アクセス	都市内交通	75	公共交通の利便性
		76	鉄道駅・バス停密度
		77	交通渋滞の少なさ
	都市外アクセス	78	空港の利用のしやすさ
		79	新幹線の利用のしやすさ
		80	インターチェンジ数
	移動の容易性	81	都市のコンパクトさ
		82	通勤時間の短さ
		83	駅のバリアフリー化率

心理学的満足度などの指標は、住民の主観評価をよく示しており、数値指標を補うには良い指標だと考えられる。ただ「住めば都」といわれるように、主観的な評価では、どうしてもバイアスがかかって、良い指標が作りにくいのではという批判が出るだろう。さらに「安全」、「災害に強い」などについて否定する者はいないだろうが、その程度については年代、年齢によって求める水準が異なることは確かであり、数値が同じでも主観的評価が全く同じになるとは考えにくい。例えば、医療について、若い世代はそんなに重視していないことは容易に想像できる。若い世代はまちに活気や新奇性を求めるだろう。子育て世代にとっては、学校や保育園など子供の養育・教育施設が非常に重要である。対して高齢者にとっては、医療や介護の充実が一番重要であろう。これらの要求を同時に満たすことはまちの行政にとっては特に財政的に見ると困難な課題である。このことから考えると、ひとつの尺度「まちの満足度」では町の全体を正しく評価できないことが推察される。ただ個別の指標、例として「安心」、「快適」などに絞れば、比較的正しく満足度を評価できるかもしれない。この場合どのような指標が適切なのだろうか。人が集まるところという考え方もあるが、東京と首都圏は人の集中が激しいため、住みやすいという評価は低いのではないかと思われるが、それでも人は集中している。それは集まって住むことが他の不便さに比べて勝っているからであろう。また人間関係の距離感も重要である。

これを補う方策として、住みやすさなどを数値のみで示すのではなく、例えば、「活気のある」、「明るい」、「落ち着いた」といった形容詞との組み合わせで表現することにより、誰にでもイメージしやすく、同時にまちの長所、短所をより明確に示すことができると考えられる（参考：井庭崇 2013）。これにより町の住みやすさを多面的、総合的にとらえることができるのではないだろうか。

尺度作成の試み

考えられる視点とその（主観的、客観的）尺度を整理すると、以下の視点が考えられる

1. 空間の視点

数値尺度としての快適さは、公園の面積、住居の大きさ、木々や池など自然物の面積（田園的尺度といえるかもしれないが）、人工的の比率（都会尺度といえるかもしれないが）で評価できるだろう。主観的尺度としては、自然、風景、景色、美的要素が考えられる。「明るい」、「暗い」、「寒々とした」、「のどかな」、「のんびりした」、「陽気な」、「涼しい」、「暑い」、「避暑地的な」、「避寒地的な」、「清々しい」、「さわやかな」などがあげられよう。

建築物の評価に関しては、有形文化財の指定を受けた建築物の数、その他寺社仏閣など歴史的な建物の数などが評価の対象となるだろう。一方、主観尺度の候補として、「重層的」、「古くさい」、「新しい」、「年老いた」、「若々しい」、「ひなびた」、「整った街並みの」、「美しい景観の」、「落ち着いた」、「近代的な」、「都会的センスのある」、「廃れた」、「荒れた」、「田舎っぽい」、「田園都市」、「雑然とした」などの形容詞が挙げられよう。（パイ インターナショナル編著 2019）。また景観などの美的尺度として、かなり主観的な印象のある形容詞であるが、「センスのない」、「センスの

ある」も挙げられる。

2. 利便性の視点

この尺度は、文字通り解釈すると暮らしやすさの尺度ともいえるが、例１では、商業の尺度として定義されていた。この尺度で重要なポイントは世代や年齢、またはライフステージによって評価が異なると推定されることである。例えば、子育てに向いた（保育園、幼稚園の数）、あるいは老後も安心である（病院の充実度、老人施設の数）などが数値尺度であるが、主観的な尺度としては施設の対応の質もまた重要であろう。

交通の利便性には、中の移動は公共交通機関の充実、近隣の町に時間をかけずに行ける。結果としての車の所有率などが数値尺度として挙げられよう。

3. 経済や商業の視点

数値尺度としては、物価や商店の数と種類が挙げられる。特にショッピングモールなどの大型店舗の数などが考えられるが、人によっては専門性の高い商店（の専門店）などの存在が重要かもしれない。

4. 富裕度の視点

町の財政、税収、家の大きさ、新築戸数や地価も数値尺度になるだろう。ただし、これは高いことが一概に良いとはいえず､住みやすさの尺度にはやや馴染まないかもしれない。しかし安全･安心尺度と正の相関があることは推測される。

主観尺度としては、「活気がある」、「元気に満ちている」、「明るい」、「陰気な」などが挙げられる。

5. 防災の視点

この尺度としては、自然災害と人災のふたつがある。自然災害（台風、地震、感染症）は地理的環境の制約も大きい。自然災害では、施設数、避難所数などが尺度に入るだろう。災害に強いコミュニティも重要であるが数値尺度としては、難しいかもしれない。

人災では、数値尺度では犯罪数ということになる。

6. 医療の視点

医療の心理尺度として、「安心な」、「質の高い」ということが挙げられよう。

7. 人の対応の視点（石盛　2010、西村幸夫 2007）

これには数値データは考えにくい。主観的尺度として「親切な」、「保守的」、「年代」、「人情がある」、「革新的」、「よそよそしい」、「希薄」、「濃い」などが挙げられる。また、「開放的」、「閉鎖的」、また雰囲気として、「落ち着いた」、「騒々しい」という形容詞も考えられるよう。災害に強いコミュニティはここに入るだろう

8. 文化の視点

文化の尺度として、舞台芸術　音楽、演劇の領域があるが、数値尺度としては、まずホール（またライブハウス）などの施設数と講演回数がある。その質については、数値尺度にはしにくい。

食文化もある。これは特に伝統的な造り酒屋やワインやウィスキーなどの醸造所、味噌醤油な

どの製造所の存在は大きい。また美術館も重要である。

9. 個性の視点

町には個性が必要である。「個性的」vs「どこにでもある」、「顔がある」vs「特徴がはっきりしない」。首都圏近隣の多くのまちは地理的環境が互いに似ていることもあって景観等町の特性が類似してしまう。そのため横並びとなってしまって特徴を出しにくいという事情がある。そのための比較としては東洋経済新報社の指標は適切な指標であるともいえる。

以下は、本学の学生に主観的に評価してもらった 2 都市の評価である。

これを見ただけでも町の特徴がわかるが、この評価に、形容詞で、例えば熊谷市では「夏は猛烈に暑い」、宇都宮市では「歴史の名残が残る」などということを付け加えると印象がより具体的になるのではないだろうか。

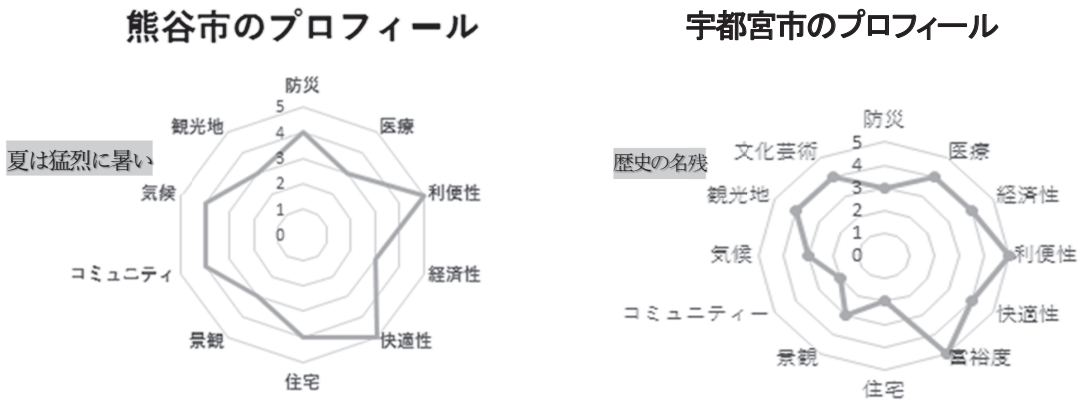

図 1 ふたつの市のプロフィール

次に、二つの町をとりあげて、もう少し考察を続け、仮のプロフィールを作成してみたい。。

尺度としては、景観、住環境、医療、防災、経済性、交通利便性、快適性、文化芸術、コミュニティ、観光地度、富裕度、町の財政、個性を考えてみたい。

1. 北海道登別市の概要　　人口　約５万人

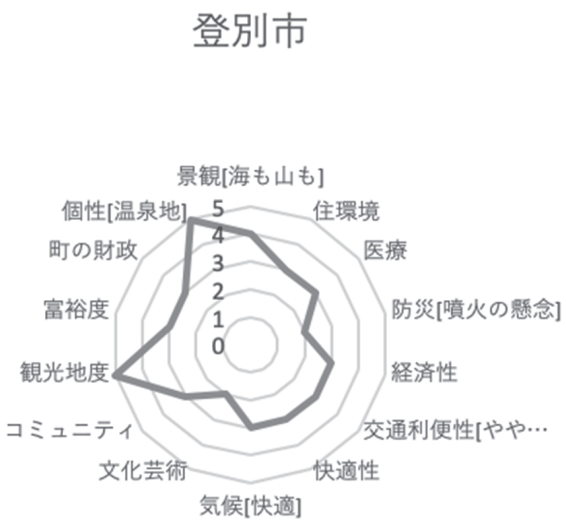

図２ 登別市のプロフィール

景観と気候　海も山も

海に面しているが、山も近くに迫っている。温泉街は山の中にある。北海道ということもあり夏は過ごしやすい気候だが、冬の場合も積雪が比較的少なく、最低気温も道内では高い方である。

街並みに関しては、特に注目に値する建築物は特になく、歴史的な町並みは特にないように思われる。

住環境

積雪も少なく、最低気温も比較して高いため、特に困難ということはないと思われるが、おそらく標準的かと思われる。ただ地方都市の例にもれず、人口減少と老齢人口比率の増加は市の課題である。

医　療

病院は市内にもあるが、近隣の室蘭市（人口約８万）や苫小牧市（人口約 17 万）にある規模の大きい病院が利用されるようである。近隣との連携で、それなりに利便性がある。

防災　噴火の懸念

近くに火山があり噴火の可能性がある。温泉街はかつての噴火口の直近にあるので、長期的には防災対策が重要になってくるのではないだろうか。火山災害への備えが重要であろう。

経　済

就業統計では 72% ほどが第三次産業に就業している。

交通利便性　やや問題

北海道全体がそうであるが、公共交通機関が特に鉄道が脆弱である。とはいえ、距離的には札幌に比較的近く、隣接してやや人口規模の大きい苫小牧市（人口約 17 万人）と室蘭市（約 8.5 万人）があり、両市とも交流がある。

快適性

文化芸術

文化的施設はほとんどないと思われる。ただ、「登別くま牧場」は世界唯一のヒグマ専門の博物館ということもあり、学術的に価値の高い施設である。また知里幸恵はアイヌ文化に関して重要である。教育環境として、高校は登別青嶺高等学校があり、登別明日（あけび）中等教育学校の後期課程がある。

登別市民会館が 1983 年開館。地上 2 階で大ホールは収容人数 700 人、2 階には収容人数が 400 人の中ホールがある。利用率は高くないようである。

コミュニティについて

特筆すべき特徴はないように思われる。

観光地度

温泉街が全国的にも知名度が極めて高い。経済的にも第三次産業の従事者が 7 割ほどである。その他、水族館（マリンパークニクス）、歴史テーマパーク（登別伊達時代村）、前述のクマ牧場などがある。新型コロナウィルス感染の前には、外国人観光客の訪問数も一定数あった。しかし、オートキャンプなど、近年のアウトドア活動にはまだ施設が対応できていないように思われる。

財　政

特筆すべき特徴はないように思われる。

個性　温泉地

個性として、温泉地が全国的に有名である。知名度がある。

2. 長野県小諸市　人口　4 万 2 千人

尺度として、景観、住環境、医療、防災、経済性、交通利便性、快適性、文化芸術、コミュニティ、観光地度、富裕度、町の財政、個性を考えてみたい。

図 3. 小諸市のプロフィール

景観　落ち着いた

山間にあり、特に中心部てば平地が少ない地形である。（一部だが）歴史的街並みも存在する。これは、江戸時代に北国街道の宿場町として栄えていたことの名残りである。その後、明治時代から昭和の初期までは、生糸産業で栄えていた。

住環境　やや快適

地形的に、坂が多いという問題がある。また地方都市の例にもれず、人口減少と老齢人口比率の増加は市の課題である。

医　療

まちの中心部に比較的大きな病院「浅間南麓こもろ医療センター」があるが、近隣の佐久市の病院とも連携している。

個　性

長野県内を中心に展開する中規模スーパーの本社があることで、食材の質は高いようである。歴史がある町なので、造り酒屋、造り味噌屋がある。ただ造り酒屋は一軒を残すのみである。

防災　安心なまち

自然災害については、近隣に過去に何度か大噴火を起こした浅間山を控えている。ただし小諸への噴火の影響は過去の記録から見た限りでは、そんなに大きいものではなさそうである。その他、

歴史に残る災害としては、江戸時代（1742 年「寛保 2 年」）に「戊の満水」と呼ばれる大きな水害があったとの記録が残っている。

経　済

長野県内を中心に展開する中規模スーパーの本社がある。

歴史がある町なので、造り酒屋、味噌屋があるが、特に造り酒屋は一軒を残すのみであるのが残念ではある。

交通の利便性

これに関しては、地方のまちの典型例で、しなの鉄道は駅の数も列車の本数も少なく、近隣の町に行く場合でも自家用車以外は選択されることはほぼないといえるだろう。市内の移動も自家用車以外の交通手段は現実的ではないが、オンデマンドタクシーのような試みもあり、これについては希望が持てるかもしれない。道路事情に関しては、坂が多いまちということもあり、自家用車であっても、雪上の運転に慣れていないと冬の積雪の時期には非常に移動も困難である。

交流　近隣の軽井沢町、御代田町、佐久市、上田市など周辺の市や町との交流がある。かつては国鉄信越線の駅があったため、駅が町の重要な拠点であったが、現在の小諸駅は第三セクター鉄道しなの鉄道の駅となり、乗降客の大幅な減少により、この周辺は人の流れは減少している。

快適性

夏は比較的涼しいことが多かったため、古い家ではクーラーが入っていないことが多い。ただ近年は温暖化傾向にあり、夏はかなり暑くなる。

文化芸術　古めかしい

島崎藤村、高浜虚子などが小諸ゆかりの文学者であるが、現在では町の文化活動に対する影響力はかなり減ってきているように思われる。ただし、これは小諸市のみの問題ではないので、まちづくりの要因として、文学をどう位置づけるかはわが国全体の課題であろう。

舞台芸術には、ステージという場が必要であるが、ステージのあるホール（712 席）は、1984 年に開館したものであり、だいぶ老朽化している。2011 年に 234 席の多目的ホールが中心部に作られたので、今後このホールの利用も進むのではないかと思われる。

音楽教育については、小諸高校には地方には珍しい音楽科が設置されているが、生徒数は減少気味のようである。

教育環境として、小諸高校、小諸商業高校というふたつの高校があるが、生徒数減少により等号が検討されている。

コミュニティ

歴史文化と観光資源　落ち着いた町

観光施設として、公共の日帰り湯施設、いくつかの小さな規模の温泉施設、標高 2000m の高原にあることが売りの高峰温泉ホテル、浅間山を中心としたアウトドア活動、懐古園（春の桜、秋の紅葉など）、長野県で最古の動物園などがあげられるが、施設の場所が分散しているため、車がないと施設間の移動は困難である。かつては団体の観光客がかなり多かった。しかし、外国人観光客はほとんどいなかったように思われる。特筆すべき施設として公益財団法人が運営している安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターがある。また画家として、地元出身の小山敬三がいる。

富裕度と町の財政

特筆すべき特徴はないように思われる。

町の個性　コンパクトシティ化

小諸という地名は、首都圏で展開しているチェーン店「小諸そば」の名称からよく知られているように思われる。とはいえ、経営者は小諸の出身者ではないとのことで、「小諸そば」の店は小諸には存在しない。

また、町の中心部の空洞化が目立つことから、現在、小諸市はコンパクトシティ化を進めており、市役所、規模の大きい病院、図書館、ホールなどの公共施設を近い場所に集中させている。その他、中心地の水道の配管に問題を抱えている。今後の重要な課題である。

まとめ

以上、主観的な尺度を具体的に適用してみた。町の特性　比較できる形でありながら、その特性をわかりやすく標記できるのではないだろうか。

文献

石盛真徳　2010 「コミュニティ意識と地域情報化の心理学」 ナカニシヤ出版
井庭崇　2013 「パターン・ランゲージ」 慶應義塾大学出版会
岩橋俊哉　2018「心理学から見たコミュニティづくり（コミュニティの心理学的評価尺度を作る意義と試み）大東文化大学紀要第 57 号
ウィリアム．ペン・デュボア 1986「二十一の気球」 講談社青い鳥文庫
村上宣寛 2011「性格のパワー」日経 BP 社
レイ・オルデンバーグ（忠平美幸訳） 2013「サードプレイス」みすず書房
デービッド・アトキンソン　2015「新・観光立国論―イギリス人アナリストが提言する 21 世紀の『所得倍増計画』」東洋経済新報社
西村幸夫 2007「まちづくり学」 朝倉書店
西村幸夫、野澤康　2007「まちの見方・調べ方」 朝倉書店
パイ インターナショナル編著　2019「地域発！つながる・集める施設のデザイン」 パイ インターナショナル
ハーズバーグ　2009　動機づける力―モチベーションの理論と実践（Harvard Business Review Anthology）ダイヤモンド社

インターネットのサイト
東洋経済新報社　2020 最新版！「住みよさランキング 2018」トップ 50 | 住みよさランキング 東洋経済新報社
https://toyokeizai.net/articles/-/356816 2020
森記念財団　都市戦略研究所「日本の都市特性評価 2019」http://mori-m-foundation.or.jp/ius/jpc/
Rich Benjamin 2015 “My road trip through the whitest towns in America” TED presentation www.TED.com
小諸市公式ページ https://www.city.komoro.lg.jp/
登別市公式ページ　https://www.city.noboribetsu.lg.jp/